

# 「ふるさと春日井学」研究フォーラム

## Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の創生なし』

# 会報

NO. 30

2015.8.31発行

編集責任：河地 清

[Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp](mailto:Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp)

## 第30回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

### テーマ『ふるさと春日井の特色ある文化一書の魅力 III』

8月9日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『ふるさと春日井の特色ある文化一書の魅力』で開催しました。講演は、愛知教育大学講師・書家の安達柏亭氏に『ふるさと春日井の特色ある文化一書の魅力III』と題してⅠ昭和の春日井書道史 Ⅱさまざまな書の表現（書体、書風、書の基本、文房四宝と表現）Ⅲ書の魅力（書学で大切なもの）について、わかりやすく解説していただきました。実技を交えたお話は書への興味を引くと共に、書の魅力についても認識を新たにできたフォーラムでした。

報道記者も含めて、市民20名の参加がありました。



「近現代書道史と春日井の書道」と題して講演する安達さん＝春日井市春日見町で

春日井市美濃町の書家、安達柏亭さん（六五）が九日、同市春日見町のささえ愛センターで「近現代書道史と春日井の書道」と題して講演した。安達さんは市民二十人を前に、昭和の書道史を「芸術として発展した結果、展覧会主義の考えが主流となり、書の日常性が薄れた」と解説。昭和期の春日井について「多くの地域で特定の一流派が定着する中、さまざまな流派が幅広い表現活動を認め合い大きな視野で書を研究していた」と述べた。

書道の筆の持ち方や筆遣い、文字の配置といった書の作品を見る際に注目すべき要素も説明した。

講演は、春日井の歴史や文化を学び、魅力を再発見する「ふるさと春日井学」研究フォーラムが主催した。（佐久間博康）

## 書道史や鑑賞法解説

春日井 書家・安達さん講演

中 旬 新 聞

2015年(平成27年)8月11日(火曜日)

講演する安達柏亭氏（報道記事より）



書の魅力を解説する安達柏亭 氏



参加者による揮毫体験

### －発表要旨－

『ふるさと春日井』の特色ある文化 『書の魅力』シリーズⅢに再び安達柏亭氏(春日井書道文化研究所)に講演いただいた。演題は「近現代書道史と春日井の書道」とされた。

#### I. 昭和以前(明治・大正)の書道

春日井の書道史をみると日本全体のことが見えてくると話し始められた。明治の末年には、一流一派による門流ができあがりつつあった。人脈も含めて最も大きな影響力を残したのは日下部鳴鶴(くさかべめいかく、1838-1920)である。「書法は漢魏六朝の峻抜な用筆によって、結構は唐碑の斉整なものをとる」と評される。その鳴鶴を継ぐ第二世代には、渡辺沙鷗、近藤雪竹、丹羽海鶴、比田井天来などがある。(注、この4人が鶴門四天王と呼ばれる)。学問的な方法論、スタイルとしての鳴鶴流までさまざまな継承者の出現があった。このうち最も壮大な展開をしたのは比田井天来(注、1872-1939、「現代書道の父」と呼ばれる)であった。碑版法帖の体系化に努めた人に、吉田苞竹、川谷尚亭、辻本史邑がいる。日下部鳴鶴のほかに大きな影響を与えたのは西川春洞(1847-1915)であり、武田霞洞、豊道春海などの門人がいる。

#### II. 昭和の書道

芸術としての書表現が盛況、表現の多様化や国際性など書は大きな変貌を遂げた。また会場芸術と展覧会主義が主流となり、書の日常性が薄れ、書家だけの書という傾向を強めた。

「書の分野」には、漢字・かな・漢字かな交じり・少字数・篆刻・前衛(文字性、非文字性)

「書体」には、篆書・隸書・楷書・行書・草書「書風」には、漢隸風・六朝風・初唐風・明清風・王羲之風・鄭道昭風・歐陽詢風・褚遂良風・顔真卿風・王鐸風がある。

「展覧会」には、日展(第5科)・毎日書道展・読売書道展・中日書道展・東海書道芸術院展等がある。

### Ⅲ. 書道団体の活動

鳴鶴や春洞が他界した後、大正 11 年に「日本書道作振会」が結成され、組織づくりによる展覧会活動へと展開していくことになる。昭和に入ると書家の組織づくりは高まりを見せ、昭和 3 年の戊辰書道家会、同 5 年に泰東書道会、さらに同 12 年には大日本書道院が設立された。書道団体の結成と呼応して美術館を舞台としての大規模な展覧会での活動が活発化する。展覧会活動は芸術意識を高める役割を果たしていくが、一方で**師風**に追随しながらも作家を育てる場として拡大していった団体もある。

### Ⅳ. 表現方法の多様化

昭和 8 年、比田井天来に教えを受けた若い世代が**上田桑鳩**を中心に「書道芸術社」を結成した。**桑原翠邦**、石橋犀水、**金子鷗亭**や大沢雅休、**手島右卿**らが名を連ねた。天来は機関紙に「古い歴史を持つ書道は時代の流れに伴って幾多の変遷を経てきたのである。それらはすべての時代の背景の前に立ち、各時代の反映である。現代に生きている我らには自らの時代の書がなければならぬ。(略)現代の書を作るためには過去の書より生まれねばならぬ。明治大正の二時代において、先覚は献身的復古運動に絶叫された。しかし、復古そのものが最後でも目的でもない。この基礎に立って古いものを現代化し、あるいは進んで新しく生み出すことに意義がある。」と述べている。目下部鳴鶴による六朝書の導入、比田井天来によるその体系化と芸術意識は、その延長線上に時代を表現したものとして現代書を提示している。現代の文体によって書表現する「近代詩文書」も意味を理解しやすい「少字数」(注、一字から三字の少字数書)も文字を素材としない「前衛書」までがこの時代に花開いた。しかし、書道芸術社の活動は新しい書の歩みと認知されたが、史的展望を欠くがための危険性もあった。**西川寧**らは考証学に基いた理論性を持つべきと主張し、文字表現の根源に向って歴史的に捉えようとした。今日の謙慎書道会、読売書法会の隆盛を築いていくことになった。

### Ⅴ. 春日井の書道の歴史

“書のまち”を標榜する春日井は、東海地区の書家たちからも書道の盛んな土地柄と評されてきた。特に昭和の中頃以降がもっとも顕著で、書壇で活躍する春日井在住書家が多かったためと思われる。それは本市において最初に結成された書道研究団体「秋萩会」の活動があったことに起因する。「秋萩」の名は小野道風の作品と伝えられる『秋萩帖』に因み名付けられてきたものである。結成されたのは昭和 19 年頃と推察されるが正確なところはわからない。戦時中であったと思われる。設立の中心となったのは**藤田東谷(1909-2009)**であり、流派を超え、この地域の書道人で構成された書道の研究団体であった。小野道風の顕彰活動を目的として結集した団体である。発足当時のメンバーは子弟関係ではなかった。このメンバーは後に、津金鶴仙主催の凌雲会、桑原翠邦の書宗院、大池晴嵐の率いた東海書道芸

術院、手島右卿の独立書人団、金子鷗亭の創玄書道会、西川寧・青山杉雨の謙慎書道会など、我が国の現代書道の中核となった様々な会に所属し、中心的に活躍する書家となっている。まさに全国の書道組織の縮図のような団体がこの春日井にあった。藤田東谷の主導した小野道風顕彰活動を通じて書道の振興に寄与しようとする活動に賛同するとともに、一流一派にこだわらず、幅広い書表現活動を認め合う方針がこのような活動を可能にした。秋菽会の研究会は、さまざまな考え方をもつ書家が作品を持ち寄り、互評会形式で意見を述べ研鑽するところであった。めざす書の方法が違う人たちが、ここで学んだことが基礎となり大きな視野で書を見ることができたのである。活動は昭和 50 年代はじめまで続いた。東谷没後は休会となり、自然解散となった。

## VI.春日井市に関する主な書家たちの略歴

東谷、蒼碩、東崖、文堂、幽谷、碧陽、啓道、誠心、峰道、牧風、柳城、立強、昌泉の師事・指導を受けた方の紹介などがあったが略す。

## VII. 実演

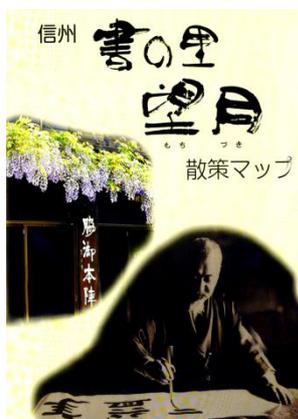
講演の始めに「文房四宝」の話がされ、筆と硯、墨、紙について説明されていたが、講演の終わりに、画仙紙に実際に書いていただいた。参加者から 2 名が、実際に安達氏の「四宝」を使って書かせてもらい手ほどきを受けた。日常の中に毛筆を生かすことが大切で、意識の中に書の日常がある。看板の字もそういう意識で見えていくことが大切と説かれた。

(記録：塚田忠雄)

## OPINION

### 『ふるさと春日井「書の風景」』

—「書のまち春日井」「まちづくり」の課題—



望月町の観光パンフレット



2002年現代書道家による屋号、看板揮毫会の模様

上記の写真は、長野県佐久市望月町 NPO 法人望月まちづくり研究会発行の『**信州 書の里望月 散策マップ**』です。題字は、書家石飛博光氏の揮毫によるものです。

残念ながら『書のまち春日井』のガイドパンフレットではありません。

ふるさと春日井の「まちづくり」の在り方に「当てつけ」を言っているつもりはありませんが、地域の魅力、特色を生かした見事な「まちづくり」の実践例だと思いました。春日井にも立派な「道風記念館」という博物館があります。書道文化を盛り上げるイベント、行事も数多く行われています。小学1年生から毛筆に親しむ教育実践も行われています。勝川商店街の店舗には書家の人たちに揮毫していただいた屋号、看板が掛けられています。「望月町」よりも多彩な取り組みをしているはずなのに、今一「書のまち春日井」のインパクトあるイメージが出てこないと感じるのは何故でしょうか。

言うまでもなく「まちづくり」の基本は「文化、歴史、自然」をベースとして進められなければならないことは、理論上の常識です。同じ書の文化と歴史をもつ「ふるさと春日井」にとっては、とても良い参考事例ではないでしょうか。かといって「まちづくり」は「まね」をすれば成功するわけではありません。むしろ、どこにもない「独創性」とどこにも負けない「ふるさと意識」というものがなければ「まちづくり」は成功しないと思います。

小野道風という歴史的存在をもつ環境と全市的に書道文化の盛んな土地柄は、「書の里」としての環境作りをしている望月町と比田井天来という歴史的存在をもっているという点で、コンセプトが同じです。「小さな地域だから出来るのだ」という言い訳を語る前に、春日井では何故このような盛り上がりが出て来ないのかを考えることは、今日的課題だと思います。産・行・民協働の取り組みと知恵を出し合う努力が今こそ必要なのではないでしょうか。一流一派を超えた書家の人たちの「まちづくり」を意識した協力が欠かせません。望月町は中山道の宿場としての歴史街道の魅力を活かし、比田井天来の拓いた現代書道の歴史的文化を最大限に活用しながら地域の特色を創生しているという点で「まちづくり」の典型的な成功事例といえます。流派を越えた書家の人たちの協力が鍵を握っています。

春日井にも下街道の歴史的魅力と小野道風と書道文化の特色があります。これらをどのように活かしながら、地域を創生してゆくのかということを、当事者である地域の人々が試行錯誤しなければ決して地域の活性化も創生もないと思っています。 (文責:河地 清)



「桑原翠邦」の書碑 「手島右卿」の書碑 「上田桑鳩」の書碑 「金子鷗亭」の書碑

天来とその門流たちの石碑が並ぶ天来自然公園（前掲『パンフ』より引用）

次回

「ふるさと春日井学」  
研究フォーラム（案内）

第 32 回

日 時：平成 27 年 10 月 11 日（日） 13:30～15:30

『ふるさと春日井の魅力』てなに？

講演：宮本 忠博 氏（タレント・春



日井市広報大使）場 所：市民活動支

援センター・ささえ愛センター

2階第1集会室

フォーラム内容：幅広くテレビ、ラジオでタレント活動をしておられる視点からふるさと春日井の魅力とは何かを語っていただきます。・・・続きは FORUM で

（各回非会員の方のみ資料代 500 円徴収させていただきます。）

# どなた様も自由に参加して下さい。

事務局：〒486-0825 春日井市中央通り 2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索